

細則様式第 4 号

論文審査及び最終試験結果報告書			
氏 名	黒澤 繭子		
入学年度	平成 22 年度	学籍番号	10GG602
領 域	健康支援科学	分 野	健康増進科学
審査委員	主 査	木田 和幸	
	副 査	一戸 とも子	
	副 査	渡邊 純	
	副 査	西沢 義子	

論文題目： 臨床における看護職者の勤務状況と慢性疲労の現状に関する研究

審査結果要旨：

本論文は看護職者の勤務状況と慢性疲労状態を明らかにするために、2つの研究を行い纏めたものである。研究1では質問紙調査法を用い、東日本地区の女性看護職者 1,676 名の勤務状況の実態ならびに蓄積的疲労徴候インデックス（CFSI）を用いて慢性疲労の実態について詳細に分析している。研究2では女性看護職者 18 名を対象とし、日勤帯の歩数、運動量、唾液アミラーゼ値、疲労兆候（CFSI）について調査・分析した。

研究1より CFSI の平均訴え数が有意に多い勤務環境として、帰宅時間が不規則、時間外勤務が月 20 時間以上、ヒヤリ・ハット報告が月 3 回以上、3 交代勤務、昼食休憩時間 60 分未満であった。CFSI 平均訴え率によるレーダーチャートでは 20 歳代で、月平均 20 時間以上の残業、3 交代勤務という条件に該当する看護職者は慢性疲労が蓄積されやすい状態であることも究明した。

研究2より、病棟勤務者の運動量がやや多いものの、外来勤務者の平均歩数・運動量とほぼ同程度であった。勤務開始前の唾液アミラーゼ値は 2 群とも 60KU/ℓ以上と強いストレス状態を示したが、終了時の値は外来勤務者では低下し、病棟勤務者では逆に上昇した。また外来勤務者と比べ病棟勤務者は、時間外勤務が 20 時間以上の者が多く、ヒヤリ・ハット報告者数が 2 倍であり、慢性疲労徴候が強いことを明らかにした。

以上の結果を踏まえ、看護職者の慢性疲労の軽減には、年代や勤務状況を考慮した組織的な環境調整が必要であるという提言を行っている。審査会においては研究内容に関する質疑応答は的確であり、勤務環境と慢性疲労に関する新知見が得られ、学位（博士）に値する論文と認められる。

最終試験 平成 26 年 1 月 29 日

試験の結果は 合 格 ・ 不 合 格 と判定する。